世田谷村日記

石山修武

十月二八日

山本夏彦翁追悼のためホームページを一週間閉じる事にした。せめて喪に服し、山本さんに敬意を表したい。十二時過星の子愛児園。園長先生中沢先生とガリボーンのメンテナンスについて、その他打ち合わせ。クライアントとは時々会って話をする必要がある。昼食を御一緒して、十四時大学へ。一ノ関菅原昭二から山本夏彦逝去についてＦＡＸをもらったので電話する。室内の連中にも何か送りたいのだが。やっぱり哀しいね。師匠だったんだとあらためて考えている。十五時半来客。十八時幾つかの用件を片付けて世田谷へ。厚生館のモデルが出来つつある。面白い。がさすがの近藤理事長も仰天するかも知らんなコレハ。明日はこのモデルをもう少し整理する必要があるか、まてよ、それでは折角女性のカオスとしかいいようのないエネルギーを使ってみようという試みに反するか。女の荒馬は乗りこなすのは大変だが、未知と出会うスリルがある。しかしながらこのモデルを建築まで仕立て上げるのも相当エネルギーがいるな。

十月二九日

朝原口夫妻来世田谷村。原口家の事情で住宅建設は中止となる。仕方ない。住宅は何が起きるかわからないモノだ。十四時中国の件打ち合わせ。中里和人氏を待つも車の渋滞で現われず。世田谷での打合わせの為大学を出る。北九州の集合住宅計画の説明。厚生館のモデルチェック。くらい烏放送の小編集会議。形が生まれる過程を公開してしまおうと言うのだから、全く自分まで開放するつもりなのか、我ながら解らぬ、闇雲振りである。

十月三十日

昨日の毎日夕刊に谷沢永一氏の山本夏彦追悼文が掲載されていた。谷沢の文章、特に単語の選び方は開高健と似ているのを知った。本格的な附合いは文体にまで影響するんだな。谷沢の文章を読んで批評家の凄さというものがやはりあるのも知った。彼にああ書かれて山本さんは嬉しがっているだろう。山本に向ってボキャブラリーは潤沢ではなく、繰り返しが多かったが、文体に独特のものがあり、誰にも似ず、結局一人一派を成したと言うのがその批評の要約である。これで山本さんは文学史上に残るにちがいない。

朝地下で厚生館モデル撮影。十時前大学へ。創生入試（無試験）の採点。無試験の試験という矛盾に対面する。エスキスと面接だけで人材を選ぶのは困難極まるが、ひ弱な試験上手だけの優等生ばかりを取るよりは良いかも知れない。二〇才前の人間に特異な才能が芽生えているかも疑問だが、試みは試みだから、附合いましょう。